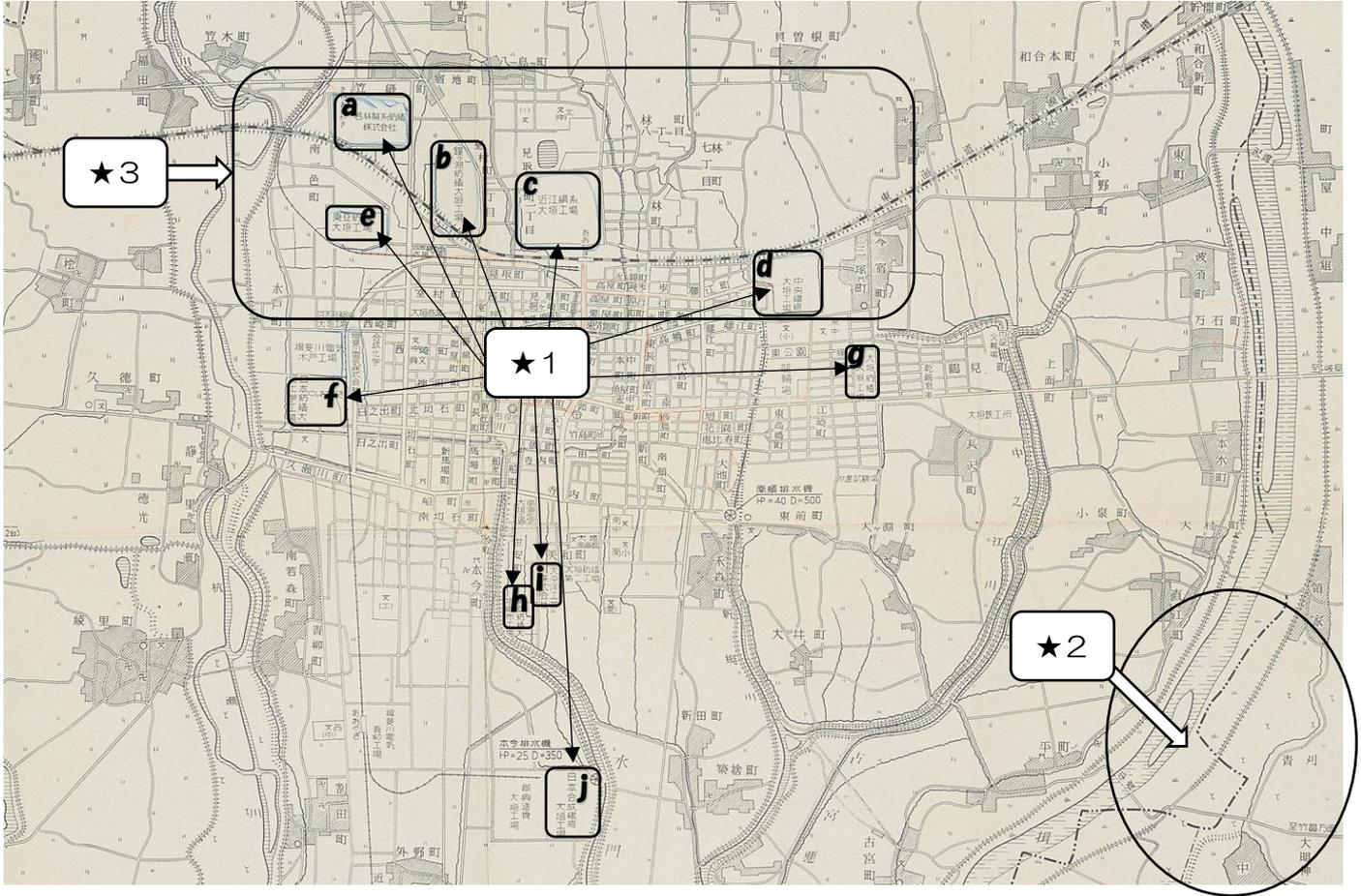


授業で使える当館所蔵地図

No.85 『大垣市全図』
 作成年：1954（昭和29）年
 サイズ：75×53cm
 作者：地学図書株式会社（調製）



【解説】

時代の移り変わりとともに町は発展し、そして土地利用についても変化が生じる。特に工場などの大型施設の場合、その変化を追うことはその町の発展とともに、時代の流れをとらえるうえで大きな気付きへと繋がる。今回は大垣市の繊維産業の繁栄・衰退と土地利用の変化に焦点を当てた。

上記の地図は、大垣市が作成した1954（昭和29）年の地図である。この地図には、至る所に繊維工場が記載されている。かつて大垣は繊維の町であったことが地図上からわかる。一方で現在の若者の多くからは「大垣＝繊維」というイメージはわきにくい。それは、令和4年現在の大垣市の現状を地図上で比較してみると、繊維の街大垣に大きな変化が生じていることがその理由であることに気づく。

★1 大繊維工場群

大垣市の中心から放射線状に地図上で表記されているだけでも8企業、10カ所の繊維工場が確認できる。会社名から繊維の種類も多様であり、県外の企業も多く（若林・近江＝滋賀、鐘ヶ淵＝東京、東亜・日本紡績＝大阪）、大垣という地に全国から繊維企業が集結していたことが分かる。

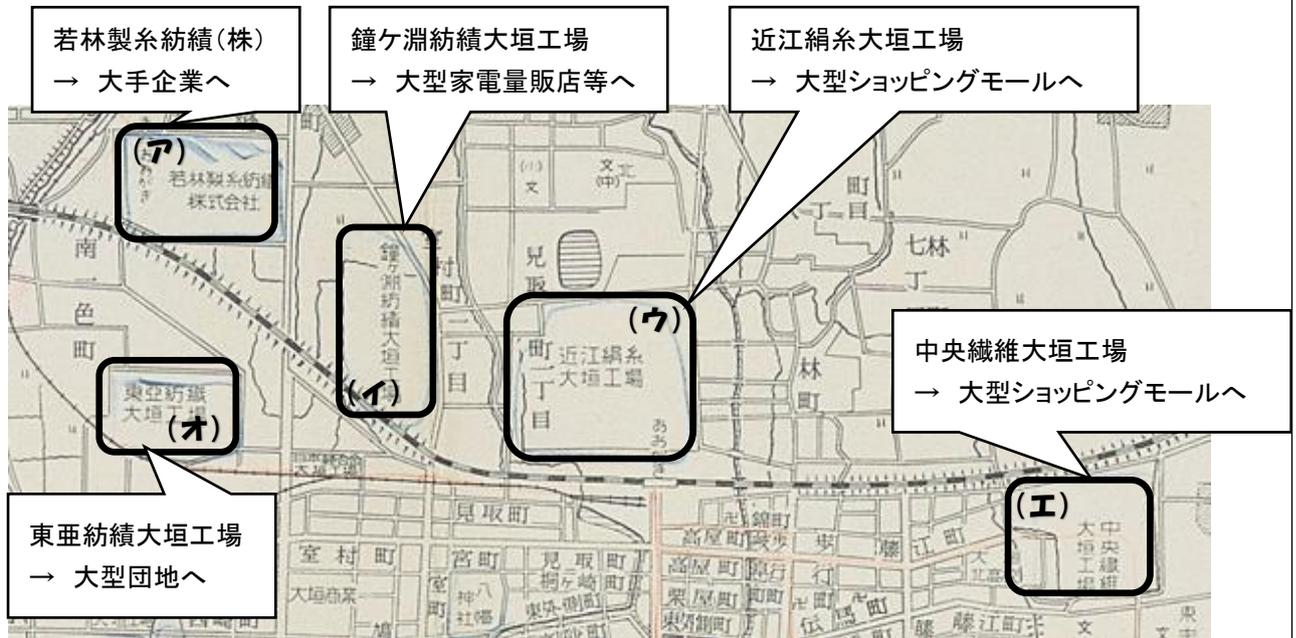
【地図上で確認できる繊維工場】

- | | | |
|---------------|---|---------------|
| a. 若林製糸紡績株式会社 | ／ | b. 鐘ヶ淵紡績大垣工場 |
| c. 近江絹糸大垣工場 | ／ | d. 中央繊維大垣工場 |
| e. 東亜紡績大垣工場 | ／ | f. 日本紡績大垣化学工場 |
| g. 大垣紡績大垣工場 | ／ | h. 東亜紡績大垣織布工場 |
| i. 大垣紡績大垣第二工場 | ／ | j. 日本合成繊維大垣工場 |

★2 桑畑

大垣市の郊外には桑畑の地図記号が散在している。特に揖斐川沿いの安八郡旧牧村（現安八町）や旧下宮村（現神戸町）には川沿いに多い。生糸の原材料である繭は国産であり、当時の農地の利用についても地図上から理解が深まる。なお桑畑については地図記号の見直しの結果、2013年以降は2万五千分の一の地図では使われなくなったことも、使用頻度・ランドマークとしての重要度の変化からも指摘できる。

★3 中心地の繊維工場の土地利用の変化（令和4年度現在との比較）



高度経済成長の後、日本の繊維産業の衰退がはじまり、平成に入ると大垣市の繊維工場も徐々に閉鎖され、別の施設等へ土地利用が変化した。その中でも大垣駅周辺の立地の良い中心地の変化の特徴として、

- ①繊維産業以外の別の大企業への売却 … (ア)の事例
 - ②立地と広大な敷地を活かした（駅の利用者・駐車場完備）大規模小売店舗への活用 … (イ)～(エ)の事例
 - ③中心地・駅のそばという立地を活かした生活圏の拡大 … (オ)の事例
- が確認できる。

【用語について】

- ・製糸…絹織物の原材料である繭を生糸（糸）にするための工程
- ・紡績…綿織物の原材料である綿花（わた）を綿糸（糸）にするための工程。
- ・人絹…人工的につくった光沢のある絹糸という意味で付けられたレーヨン長繊維の名前。

【利用の例】

- 歴史において近代日本の産業革命と繊維産業の発展とを結びつける教材として活用できる。
 - 日本経済を支えた主要産業の変遷
 - ・戦前・戦後の変化 例：戦前～戦後初期までの繊維産業の発展
 - 高度経済成長期前後からの繊維産業の衰退と土地利用の変化など
- 総合的な探究の時間において、地域の過去と現在とを対比しながら調べる際に、地場産業の歴史の変遷を地図上でとらえることで地域的特色やその理解を深め、それを地域の課題解決等に活かすことができる。
 - 工場などの大施設は地図上にてランドマークとして使用されるため、古地図等を見比べると、移転の理由、移転前後の土地利用の変化や特色、発展の差が地図上で読み取ることができるため、地図を活かした情報収集・分析に役に立つ。
 - ・他地域の地場産業を地図上の土地利用から読み解く。
 - (例) 岐阜県関市：刃物産業 ※関刃物株式会社（本町通に大工場があったが倒産→現在宅地に利用）
 - ※多治見市と窯業、高山市と木工業、美濃市と製紙業などでも活用できるのではと考える。